

堀越先生のこと

高 埜 利 彦

堀越先生が、茨城大学から学習院大学に移られたのが一九七四（昭和四九）年の四月であるから、この三月で丸三十年を自白の史学科で過ぎたことになる。

四十歳から七十歳、確かに三十年は長い。もっとも、私が堀越先生を存じ上げたのは、私が着任してからのことであるから二十三年間ということになり、先生は鎌倉の現在のお宅に住まわれていた。

鎌倉のお宅は、堀越先生の東京大学時代の恩師である堀米庸三先生とのご縁をしたってのものであるが、弟子たるもの師匠に対しかくあるべきものかと、堀越先生の古風なまでの言辞や行動を、この間幾たびもうかがうことができた。

二十三年間にわたる先生とのお付き合いは、長い時間に及ぶが、これは単に二十三年間が長いというのではなく、史学科の教員は卒業論文口述試験期間を筆頭に、全員がみっちり史学科中心に時間を過すので、密度の濃い時間と想って頂きたい。このうち、先生が四十代で私が三十代であった頃の先生は、実に厳しい、激しいという印象を私は抱いていた。現在の好々爺然とした堀越先生を知る人か

らすれば、異感を持たれるであろうが、当時の先生は張りつめた緊張感が時として人を寄せつけないといった雰囲気のことが多かった。睡眠時間を削って仕事を詰めることの連続であったのであろうか、と私は想像していた。

堀越先生の文字と文体の特徴は、一度読んだならば忘れることは出来ない。私の育ったそれまでの環境では、黨先生や笹山先生のような、精確な論文を書くのが良いとされ、私もかくあるべきと考えていた。しかも私は、歴史学は社会科学とばかり思っていたから、自白に着任して、堀越先生や井上勲先生の文章に触れて、正直言って驚いた。叙述内容にオリジナリティーがあるだけでなく、文章そのものにオリジナリティーがあるのである。私の念頭にあった歴史学の論文は、数式を連ねた自然科学の論文ほどではないが、論理（仮説）を史料でいかに証明するかという点にのみ大きな関心を持っていた。堀越先生の文章には、論理を追求して主張するのみならず、いかに叙述するかにも大きな関心が払われている。というよりも、自然に流れる叙述が結果的に他の誰にも描くことのできない文

章になっているというほうが正しいのかも知れない。社会科学ではない、文学の属する人文科学なのである。

このような堀越先生に対する認識を長年持っていた私は、ここ五年間くらいに先生に対する見方を改めることになる。私たち大学教員が、学生・院生諸君との関係（教育活動）のほかに、学会や出版物などを通して多様な研究活動を行っていることは比較的良好に知られている。実はその上に、学内行政と呼ばれる大学組織の運営にも多くの時間を費やしている。学習院大学文学部には文学部事務室がなく、文学本部で法・経両学部とともに合同で事務機能を働かせている。文学部専属の事務組織が無いことで、教員が行政的な業務に手を貸さなくてはならなくなる。中でも堀越先生が任じられた学芸員資格取得委員会委員長・人文科学研究所長・企画委員長はとくに責任の重さと多くの時間を必要とされた。学芸員の委員長は学芸員担当の専任教員が不在なため、史料館に置かれた事務室の運営責任と外部博物館との折衝など、本来であれば専任の担当教員が行うべきあれやこれやを積極的にこなしておられた。

人文科学研究所は今から三年前の二〇〇一年四月に正式に発足したのだが、その準備段階から研究所の規約や運営組織を構築することを手始めに、研究プロジェクト制度の立ち上げや『人文科学研究所報』の刊行に続き、研究誌である『人文』の発刊など初代所長として研究所の基礎をみるみる築いていった。研究所が軌道に乗ったこの先には、充実した研究を蓄積していく、学習院大学人文科学研究所ここにありとの存在感を世に示すことが、初代所長堀越先生の労苦に報いる私どもの努めといえよう。

文学部内には各種の委員会が存在していて教員が配置され、文学部の学生生活や入試業務に関わる運営などを行っているが、企画委員会というのは、今後の文学部のあるべき方向性を検討し、戦略や企画を立てていく委員会である。堀越先生が昨年三月まで担われた企画委員長時代には、人文科学大学院教育研究棟の建築計画やCOEプログラムへの応募などの大きな問題があったが、私が敬服したのは、堀越委員長の作成した会議の議事録の綿密さと客観性を強く求めた姿勢とであった。企画委員長は議長として議事を進行させながら同時に議事録を作成するというもので、凡人には至難の技である。堀越先生のこのような「社会科学」的記録作成者の一面は、実は最近になって知ったことであった。

最近になって判ったことは他にもある。何年か前に桐ヶ谷斎場で行われた母上の葬儀での堀越先生は、実に淡々とされていたように感じられた。それは二度目の親との死別であったせいかと私は思っていた。それより十年以上前の父上の葬儀は、上池上の堀越先生の住まわれていたご実家で行われており、その折の先生は初めての親との死別を真正面から受け取め、ご実家で過ごされた来し方の時間を最終的にその日で止める工程を胸の内で行っていたかの様子であった。この作業を一度済ませていたから、母上の際には淡々とされていたと思っていた。

しかるに昨年五月の史料館講座で「戦後、一貧書生の冒険 書物の狩」と題して講演された堀越先生は、学生時代（一九五〇年代）にアンドレ・ジッド全集やニーチェ全集を全巻で合計一百万円を越える金額で購入されたことを語っていた。現在ならその二十倍はする

高価な本を「しがない勤め人」である父上に買ってもらったことが告げられた時、父上の堀越先生にかける深い想いと、息子である堀越先生の父上に対する想いを同時に知ることとなった。それはまた堀越先生からお子様たちにかける深い想いに連鎖する。私は自分の子供の教育問題などを堀越先生に幾たび相談に乗っていただいたとか。お子様に対するご自身の経験から導かれたアドバイスは、いつも優しさに溢れていた。

過去を振り返ることはたやすくとも将来を見通すことは容易なことではない。十代、二十代の頃は特に見通せないが、四十、五十代になっても判らないことだらけである。人生はいつも現在進行形。これからも老境でのお導きを堀越先生にお願いしなくてはなりません。私どもが老境に入る頃もお元氣でありますことを祈っております。